

〔研究ノート〕

## 日英の大学スポーツの歴史と現状

～我が国の大学スポーツへの一提言～

半 田 裕

### 目次

要約	p. 13
はじめに	p. 14
第1章 英国のスポーツの歴史と大学スポーツの変遷	p. 15-21
第1節 英国のスポーツの歴史	p. 15-16
第2節 パブリック・スクールとスポーツの歴史	p. 16-17
第3節 The Varsity Match の現状	p. 17-21
第2章 日本のスポーツの歴史と大学スポーツの変遷	p. 21-23
第1節 日本のスポーツの歴史	p. 21-22
第2節 日本の大学スポーツの歴史	p. 22-23
第3章 一般社団法人大学スポーツ協会（UNIVAS）の現状と可能性	p. 23-29
第1節 スポーツ庁の「スポーツ成長産業化戦略」	p. 23-26
第2節 大学スポーツ協会の設立と今後の課題	p. 26-29
第4章 日本の大学スポーツに対する提言	p. 29-39
第1節 早稲田大学125年周年事業のケース	p. 29-30
第2節 大阪経済大学への提言	p. 30-38
第3節 結論	p. 38
第4節 今後の課題	p. 38-39
先行研究・参考文献	p. 39

### 要約

**研究テーマ：**日英のスポーツの歴史および大学スポーツの発展の検証と当学への提言

**テーマを選んだ理由：**2019年に英国に研究視察で出向き、ケンブリッジ大学のスポーツ局との協議及び The Varsity Match（オックスフォード大学 VS ケンブリッジ大学の定期戦）を管理運営する Professional Sports Group の代表及びスタッフとの協議を含めた現地調査による英国の大学スポーツの現在の研究分析を行った。欧米に比較して特筆して遅れている我が国の大学スポーツのビジネス化への提言を行うためにテーマとして選択する。

**問題の所在：**日本においてスポーツの在り方が大きく変革する時代を迎えている、2011年に50

---

本稿は2022年3月に発刊される大阪経大論集のために作成したものである。本稿にあり得る誤り、主張の一切の責任は言うまでもなく筆者、個人に帰するものである。

本調査研究は2018年～2019年大阪経済大学共同研究費の助成を受け実施した。

年ぶりに刷新されたわが国のスポーツ基本法、その後の2015年にはスポーツ庁を創設、そのスポーツ庁では2017年から2022年に向けたスポーツの成長産業化戦略の基本戦略を発表している。大学スポーツの強化を目的に2019年に一般社団法人大学スポーツ協会（UNIVAS）を発足し、日本の大学スポーツを統括する団体も出来上がった。その団体が目指すのは課外活動として位置づけられるスポーツクラブの学生に対する教育指導と環境整備がメインとなっており、欧米諸国で行われている大学スポーツのビジネス化に関する協議は現状行われていない。

**研究の目的：**本稿の目的は日本における大学スポーツの将来に向けた施策の提言である。特に今回はケンブリッジ大学とオックスフォード大学との間に始まる大学対抗戦の歴史を研究対象とし、現在も強力に進められるそのマネタイズの手法の調査を行う。そして欧米における大学スポーツのビジネス化のスキームをいかに日本の大学現場にローカライズするか具体的な手法を、自身の所属する大阪経済大学に対する提案として最後に述べる。

**研究の背景：**サッカーで言えば、全国少年サッカー大会、全国高校サッカー、野球で言えば、春夏の甲子園における高校野球大会、インターハイ等、高校生以下の大会で学校、地域を巻き込んで盛り上がる大会が存在する。しかしながら大学スポーツで学生アスリートが目指す大会で、かつ全国的に盛り上がる大会は少ない。箱根駅伝も関東地域、甲子園ボウルも関西地区のみの盛り上がりであり全国的なものとは言及できない。

**研究の意義：**上記のような日本における大学スポーツの現状と比較し、歴史と規模の違う英国の大学対抗戦のビジネススキームを検証し、その仕組みを探る。その手法がわが国で活用可能か？を検証する。またオックスフォードやケンブリッジのような伝統校でない大学におけるビジネススキームを考察・提言する事により、全国的に大学スポーツのビジネス化を考える布石になればと考える

**研究の視点：**日英のスポーツの発展の歴史とそれぞれの国における大学スポーツの歴史を考察し、日本における大学スポーツのビジネス化の手法を検証する。

## はじめに

本稿は日本において長年の間「体育」と言う言葉の中で語られてきた「スポーツ」という概念が、2011年に50年ぶりに改定され、公布・施行された「スポーツ基本法」の成立後、どのように、この10年の間にわが国で変革してきたのか？その10年間の経緯を、特に2015年に設立された「スポーツ庁」が開始した諸活動において具体的にどのように変革してきたのかを検証する。今回はその大きなテーマを「大学スポーツ」という観点に焦点を当てる事とする。

その一つのロールモデルとして英国における大学スポーツの実例を研究課題とした。

2019年7月に渡英し、ケンブリッジ大学のスポーツ局への訪問、ケンブリッジ大学とオックスフォード大学の伝統的な定期戦である「Varsity Match」を大学サイドより委託運営を任されている Professional Sports Group の Jonathan Commingham 代表および担当スタッフとのインタビューに基づき、現在のイギリス大学スポーツの現状についても報告したい。それらに基づく検証のもと、今後の日本における大学スポーツ、特に大阪経済大学における課外活動において「大学スポーツの在り方」について政策提言することを最終目的とする。

## 第1章 英国のスポーツの歴史と大学スポーツの変遷

### 第1節 英国スポーツの歴史

欧米諸国のスポーツの歴史を語る場合、古代、中世に遡り調べていく必要があるほどその歴史は長いと言える。英国の近代スポーツについて説明する今回もヨーロッパ地域の中世に遡りその発展の過程を調べていく事とする。

「8世紀から16世紀のヨーロッパにおける中世社会は封建制度を基盤とする身分社会であった。社会のさまざまな分野で大きな変化がみられる。「革新の12世紀」には「祈る人、戦う人、耕す人」（聖職者、騎士、農民）という身分が確立する一方で、城壁に囲まれた中世都市が成立し、「市民」身分が成立した。14世紀以降、農村を基盤におく封建制度は衰退に向かい、都市が経済的、社会的に重要な役割を担うようになった。16世紀はルターによる宗教改革やコロンブスによる新大陸発見など激動の時代であり、新しい時代の幕開けであった。このようなヨーロッパの中世社会において、近代スポーツの祖型が醸成されていった。」（新井博編著 新版スポーツの歴史と文化 道和書房 2019）

この中世の時期に誕生したスポーツを下記に掲げる

- 騎士のスポーツ（騎馬競技、球技館でのラケットスポーツ）
- 都市住民のスポーツ（公開射撃大会、フットボール等ボールゲーム）
- 農民のスポーツ（徒競走、等民族的運動、野原で行うフットボール、ダンス）

これらのスポーツには一部の聖職者も没頭するほど盛んに行われており、度を越えた場合には協会から禁止令が出ることも在った。それほどにイギリスを中心としたヨーロッパにおけるスポーツという娯楽は広く同時代を生きる人々に受け入れられ、それが多くの人々の生活の一部となっていたと考える。

「15-17世紀の英国では地主階級で地域の政治的な統治者であったジェントリー（gentry：郷紳とも訳される）と呼ばれる上流階級の人達が、中世以来の伝統的なボールを使った簡単なスポーツ、また貴族が所有していた広大な野原での狩猟、釣り、乗馬等のフィールド・スポーツを楽しんでいた。続く18世紀は、中・上流階級の人たちが、伝統スポーツやパトロン・スポーツ、またゴルフ・クリケットに興じていた時期であった。

しかし、19世紀には、パブリック・スクールで学ぶ富裕層の学生達が、それまでの伝統スポーツや娯楽と違った新たなスポーツ（近代スポーツ）を作り上げる。更にスポーツが盛んになるにつれて、スポーツの興行も盛んになり、プロ・プレーヤーも現れ始めた。

18世紀以後、海外に住みつくようになったイギリス人が現地でスポーツに興じることで、英国由来のスポーツが広く世界に普及することになった。

20世紀に入るところにはスポーツは世界的に広まり、労働者階級の人達のあいだでも盛んに行われるようになると、組織化も進み、世界的な潮流を作り出した」

（新井博編著 新版スポーツの歴史と文化 道和書房 2019）

英国における近代スポーツの誕生の流れを要約すると下記のようなになる。

- 中世からのフットボールとフィールド・スポーツの発展

- パトロン・スポーツの衰退と新興ブルジョアジー（中産階級）によるスポーツの勃興
- パブリック・スクールでのアスレティシズムの誕生
- プロ・スポーツの誕生

## 第2節 パブリック・スクールとスポーツの歴史

この説では前節で取り上げた英国の近代スポーツの流れにおけるパブリック・スクールの果たした役割について述べることにする、英国のパブリック・スクールという言葉が日本人が口にすると、「チップス先生さようなら」や直近でいえば「ハリーポッターの魔法学校」にあるような、全寮制の規律正しい教育を教師との密接な関係を持ちながら学業と課外活動に打ち込む、富裕層の特に男子学生の私立中学校というイメージが浮かぶ。現在、英国では同年代の7%弱のイギリス人が私立学校に通っており、パブリック・スクールという呼称はその中の一部の有名な中等学校をさす事を知っておくべきであろう。

パブリック・スクールにおけるスポーツの歴史を述べる前に英国におけるパブリック・スクールの定義について記しておきたい。「パブリック・スクールとは、卒業生の多くがオックスフォード大学とケンブリッジ大学を頂点とする一流大学に進み、政治家、外交官、国教会の司祭、軍隊の将校、大企業の重役等々、社会的地位が高いと目される職業に占める卒業生の比率が極めて高く、その結果、英国社会のいわゆる支配階層を長い間その卒業生たちが形成してきた私立の中等学校である」（鈴木秀人著 変貌する英国パブリック・スクール 世界思想社 2002）ちなみに彼らが目指すケンブリッジ大学は1209年創設、オックスフォード大学は1096年創設である。大学そのものの歴史のスパンが日本とは比べられない。大学スポーツの歴史も同様である。

それらのパブリック・スクールのスポーツの歴史を語るこの節において、ここでは特に、パブリック・スクールでのアスレティシズムの誕生について述べておきたい。1830年～70年のあいだに、中・上流階級の子弟たちが通う全寮制のパブリック・スクールで、新たなアスレティシズム（Athleticism）が誕生した。

アスレティシズムとは、体力・技能・記録の向上を、計画的、組織的、専門的な訓練によって追及する競技主義のことである。

従来、生徒たちによるスポーツは、賭けの対象になったり暴力的であったりして、学校・教師の側から決して支持されていなかった。しかしパブリック・スクールは、あらたなアスレティシズムを、無軌道な競技主義の発展ではなく、教育的に規制する手段としてスポーツを導入していった。そのようにして道徳的・制度的に、また時間的・空間的に規制されることによって、組織化されたゲーム、とりわけチーム・ゲームに類する、近代スポーツの原型が形成されていったのである—事実この影響はやがて近代スポーツの到来を迎える明治時代の日本のスポーツの発展に大きな影響をもたらすことになる。

それだけでなく、彼らは新たにスポーツの総括組織を結成することによって、地方ごとに違っていたルールを統一し、学校間の対抗試合を可能にした。また、そこにおいても彼らは純粋に名誉を目的としたジェントルマン精神と、お金とは無縁なアマチュア精神によ

るアスレティズムを確立していったのである。

地域ごとに違うスポーツのルールを、地方で統一、そしてやがて国で統一される経緯で学校という組織が貢献した事実は米国東海岸の IVY League が果たした役割も含めスポーツの歴史の中で特筆する現象であると言えよう。

アマチュアリズムの精神は、はやくも1839年のヘンリー・ロイヤル・レガッタ・クラブの設立に際して設けられた規約に、「ボートはすべてのアマチュアでなくてはならない」という文言が明記されている。1866年、ブリックウッド (E.D. Brickwood) は競技会に、職人、職工、労働者の参加を認めないという条項を作った。1872年に設立されたロンドン・アスレティック・クラブや、1878年の漕艇クラブも、同様の内容を規定に盛り込んでいる。

こうして生徒・学生たちは、学校や大学を卒業したあとも、ジェントルマン・アマチュアの精神を掲げたスポーツ・クラブを各地に誕生させ、母校の OB との対抗戦や、他クラブとの競技会を楽しんだ。1830年～70年のあいだに、パブリック・スクールの大勢の卒業生たちが各地のスポーツ・クラブでアマチュアの精神を根づかせ、エリート層を示すアスレティズムを形成したのである。

スポーツは、パブリック・スクールで熱狂的信望を勝ち得たが、これらの学校はやや偶然ではあったスポーツとの出会いをへて、19世紀半ばにスポーツをカリキュラムの中核に据えたのである。そののちのスポーツは従来より時間的・経済的余裕のできた労働者階級の間でも行われるようになるのである。

団体競技は英国のパブリック・スクールにおいて特に重要視され、また、当時の帝国の形成においても強い影響力を発揮した。現地人にチームワークの観念を浸透させ得たのは、団体競技を通してであった。チームのためにプレーすること、キャプテンの権威に従うこと、忠誠を尽くすこと、ルールを尊重することはまさに支配者が被支配者に求める資質であった。英国の繁栄のおかげで、スポーツは急速に等しく富める者と貧しい者の文化の一部になった。19世紀中期とそれ以後の英国が首位を占めた経済的・政治的地位は英国のスポーツが重要な文化的輸出品になるであろうことを意味した。そして英国が支配した諸国において、英国のスポーツは決定的な社会的地位を占めたのである。

中世からの歴史の流れにおいて必然的に起こった「産業革命」と言う時代と社会の変革に伴いイギリスにおけるスポーツが近代スポーツへと変革をした。民衆的なスポーツはまずそれを自分たちの固有の目的に合致させようとした支配者階級に取り込まれ、やがてそこに様々な特権的なクラブが出現する。次の時代にはそこから官僚的な組織が生まれ、さらにスポーツそのものの実践はイギリスから諸外国に普及し、最終的には国際的組織が設置されるまでになる。これらの過程でイギリスの特異な教育システムであるパブリック・スクールが果たした役割は大きなものがあったと言える。

### 第3節 The Varsity Match の現状

今回の渡英の目的のひとつに、現在、ケンブリッジ大学とオックスフォード大学の大学スポーツの定期戦として開催されている競技の中で、特に国内およびヨーロッパ全域にお

いて人気の高い「ラグビー競技」と「レガッタ競技（ボート競技）」の2種目の対抗戦を大学サイドよりその権利を譲渡され、ビジネス化し資金を調達している会社がある。Professional Sports Group というロンドンに拠点を持つスポーツビジネスの会社である。その企業の担当者と会合を持ち、現状のマーケティング活動について調査してくることが目的の一つであった。

The Varsity Match について紹介する。※The Varsity Match の公式 HP ページより

「1872年に最初のバーシティマッチが行われてから、世界で最も長く続いているスポーツ大会の1つになる。これは、世界で最も権威のある2つの大学がアマチュアと学生のラグビーの頂点を決定する大会である。従来シーズンと比較すると、バーシティマッチのキャンペーンの相対的な長さは非常に短く、バーシティマッチの大事な日である12月の究極のフィナーレで最高潮に達する。バーシティマッチの大会当日への旅はユニークな体験であり、すべての選手、コーチ、サポーターに多くの貴重な思い出と伝統、誇り、卓越した文化が染み込んだ光景を与える。

2度の世界大戦などの厳しい状況下であったにもかかわらず、バーシティマッチは伝統的に12月の第2火曜日の午後2時に行われた。2007年以降は木曜日に変更され、大勢の観客を魅了し続けている。

バーシティマッチとラグビーユニオンの両方の歴史は絡み合っており、オックスブリッジラグビーは歴史的に、そして今も競技レベルの開発と洗練の最前線にいる。オックスフォードとケンブリッジはプロのチームではないが、ラグビーの伝統的な価値観と理想を推進することで、ラグビーゲームのベンチマークであり続けている。アマチュアスポーツの頂点として、バーシティマッチはユニークで必見のスポーツイベントと言える。

バーシティマッチキャンペーンは、マイケルマス学期が始まる前の毎年9月に例年始まり、シーズン前のトレーニングと海外ツアーが行われる。これは、チームが12月に向けた勝利の道に入り、外国のホスピタリティを体験する機会を与えてくれる。The Varsity Match は、オックスフォード大学とケンブリッジ大学の間の長年のライバルを象徴すると同時に、アマチュアラグビーの継続的な活力と精神を示している。大会の重要性は、オックスブリッジラグビーとバーシティマッチが過去135年間にラグビーのゲームの開発と洗練に多大な貢献をしたことによって強調されている。

イングランドとウェールズの最初の国際ラグビーマッチが行われてからわずか数か月後、1872年2月にオックスフォードとケンブリッジの最初のバーシティマッチがオックスフォードのユニバーシティパークでデビューした。その最初の試合では、オックスフォードはダークブルーのジャージを着用し（一部の段階では白を着用していた）、ケンブリッジはピンクでプレーし、1876年にライトブルーとホワイトに変更した。1872年以来、バーシティマッチは毎年開催されており、ラグビーカレンダーで最も盛り上がる試合の1つとして有名だ。翌年（1873年2月）、ケンブリッジのパーカーズピースでリターンマッチが行われた。1877年に、試合を中立的な立場に移すことが決定され、昨年（1876年）のイングランド初のホームインターナショナル大会の会場であるケニントンオーバルが選ばれた。1880年代、

バーシティマッチは、ブラックヒースFCの本拠地であるレクトリーフィールドを含むさまざまな会場で行われた。1887年12月、試合はフラムのクイーンズクラブに移された。会場はオープンしたばかりで、ヨーロッパで最高のスポーツクラブと見なされていたわけである。クイーンズクラブは、第一次世界大戦が勃発し、バーシティマッチを含むすべてのラグビーの試合が中断されるまで、会場であり続けた。1919年と1920年の12月には、クイーンズクラブでバーシティマッチが再び行われた。しかし、この頃には、増え続ける群衆を収容するには小さすぎたため、1921年12月、バーシティマッチは、戦時中（試合があったとき）を除いて、ラグビーの聖地と言われるトゥイッケナムのラグビーフットボールユニオンのグラウンドに移され、それ以来トゥイッケナムスタジアムが会場として現在まで使用されている。

何年にもわたって、オックスフォードまたはケンブリッジのいずれかのチームから600人以上のプレーヤーが代表的かつ国際的な名誉を獲得してきた。各大学の唯一のフォーカスは、フィールドに向かう通路に初めて並んで立つその瞬間に至るまでの試合に関係なく、バーシティマッチに勝つことである。138試合が行われ、ケンブリッジが64勝、オックスフォード60勝、14試合が引き分け。今日、試合は25,000人以上の観客と500,000人以上のテレビ視聴者によって視聴されている。

オックスフォードとケンブリッジとの間のバーシティマッチはその他様々なスポーツにおいても行われる。例えば、記録に残る歴史上初の水球の試合は1891年にオックスフォードとケンブリッジとの間でプレーされた。また女子のラグビー・バーシティマッチは1988年に初めてプレーされ、2015年からは男子の試合と同日にトゥイッケナムで開催されている。」※The Varsity Match の公式 HP ページより

ここからは通常のスポーツビジネスの基本を紹介する。The Varsity Match もこれらの権利を主体にマネタイズを図っている。

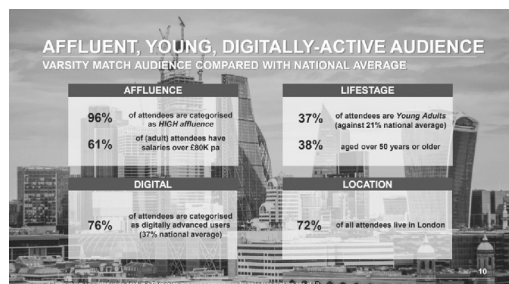
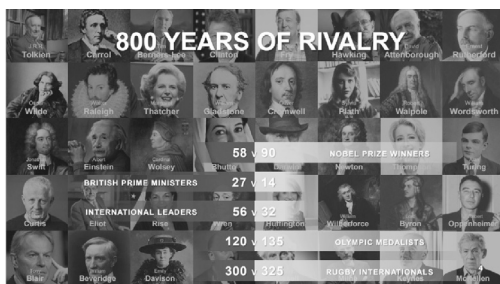
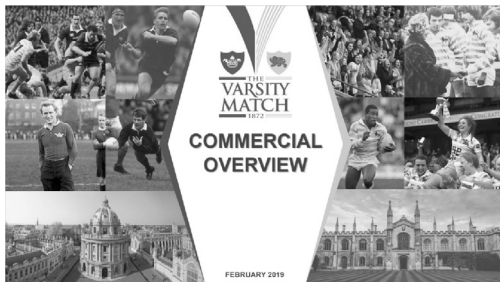
スポーツの持つ権利をマネタイズ（金銭との価値交換）する場合、次の4つの基本的な権利が想定される。ひとつずつ簡単に説明をする。

1. **放映権利**：競技自体を何らかの手法で映像化し、放映した際に発生する、独占的な放映権に対する権利料になる。大相撲をNHKが放映する場合に、NHKは日本相撲協会にお金（放映権料）を支払っているわけである。放映権料の料金に価格表は無い。要はどれだけ多くの人が番組を視聴するかにかかっている。それによって会場内の看板と番組の間に流れるCMに価値が発生するわけである。ちなみにアメリカのNFL（アメリカンフットボールのプロリーグ）のシーズンを通した放映権料の収入は年間で約100億ドルになる。日本円にすると（=100円として）年間1兆円である。※2021年3月18日のNFLの公式リリース
2. **スポンサーシップ**：大会と関与を持つことによる、ブランド価値の向上と事業数値の向上がどれほど見込めるかで協賛金額の価値は決定する。マーケティングの世界の話になる。オリンピックの場合はワールドワイドパートナーでIOCとの契約金が年間約100億円、LOC（例：東京オリンピック・パラリンピック競技大会の組織

員会)との契約金がトップスポンサーで年間25億円になる。※契約企業担当者からの情報

3. **商品化権利**：その大会・競技のために作成されたロゴマークを活用した商品の開発・販売を許諾する権利である。基本契約料と売上金額に応じたロイヤリティを獲得する権利である。ゴルフ選手のアーノルド・パーマーは傘のマークのライセンスビジネスを世界中で展開した、最盛期は日本だけで50社を超える契約商品があった。※IMGでの著者の経験に基づく
4. **興行収入**：まさに大会をライブで観戦する試合会場におけるチケット収入である。席の値段は競技の価値とともに決定する事ができる。ワールドカップ(サッカー)の決勝戦の良い席は1席14万円ほどで販売されている。

基本的な権利はこの4つになる。当然のことながら The Varsity Match もこの4つの基本的な権利の元にマネタイズを図っている。その際に協賛企業サイドに提供する大会の基本情報の一部をここに紹介する。



大会に関する基本的な情報をデータ化して協賛を検討する企業に提供している、これらの資料の枚数だけでも上記のものを含めて20ページを超える量になる。すでに長い歴史をもつ大会なので、過去に遡る情報量が半端の無い量であることは容易に理解できるがそれをそれぞれの企業が必要とする情報に加工されているところが素晴らしいと言える。

Professional Sports GroupのJonathan Commingham代表は私と同じIMGの出身者で、彼は同時期にロンドンオフィスで私は東京オフィスで働いていた同僚である。彼らが用いているこのマネタイズの手法はまさにIMGの創設者であるマーク・マコーマックがテニスのウインブルドンやゴルフのブリティッシュオープンで用いていた手法である。



簡潔にまとめを述べる。ケンブリッジ大学とオックスフォード大学のような一流校の大学定期戦は上記に掲げたオーソドックスな権利関係を膨大なデータの裏付けをもって営業する。営業先に両校の卒業生も多く存在する中でビジネスチャンスが多く存在する事は容易に想像がつく。また800年以上のライバル校の定期戦には多くの関係者の注目が集まり、毎年のラグビー競技の定期戦では2万人を超える卒業生を中心とした観戦者が集まるわけである。日本の大学スポーツの現状を鑑み、この両校のVarsity Matchの現状を羨望のまなざしで拝見していた。まさにThe Varsity Matchの当日の会場は年に一度の社交の場と化すのである。残念ながら大会が実行される12月のタイミングで渡英し、ラグビーの聖地「ティックナムスタジアム」の伝統の一戦を観戦する事は叶わなかったが多くの知見を獲得できた。この場を借りて、ケンブリッジ大学のスポーツ局長のKaren Pearce氏とProfessional Sports GroupのJonathan Camingham代表に感謝したい。

## 第2章 日本のスポーツの歴史と大学スポーツの変遷

### 第1節 日本のスポーツの歴史

さて、この章では日本のスポーツの歴史について触れて行きたい。欧米と同じくどこまで遡りスポーツの歴史を検証するのだが、ここでも第1章と同じく古代まで遡ることは避け、スポーツという文化がまさに怒濤の勢いで流れ込んで来た近代日本の幕開けの時期から考察を開始することにする。日本は徳川幕府の300年を超える鎖国政策の果てに起きた明治維新により近代日本の創造が始まっている。まさに昨年、NHKで「青天を衝く」という明治の重鎮、渋沢栄一侯のドラマが展開されていたが、たった10年から20年の間に天地がひっくり返るような出来事が矢継ぎ早に起こった時代背景をドラマでも確認できる良い機会になった。渋沢侯も一介の深谷の百姓だった人間が徳川15代将軍に仕え、やがて明治政府の重鎮として新しい日本という国の経済の創造を根っこのところで支えた人物として描かれている。第2次世界大戦後の日本もそうだが、社会の騒乱の末に、若き志のある者が日本という国にINNOVATIONを起こしていることを再認識した次第だ。

日本のスポーツにもこの時期にINNOVATIONが起こった。江戸時代という鍛錬と言えば武道が中心であり、当然それは武家及び裕福な農民、商人の子息など一部に限られたものであった。それが明治の開国とともに第1章でも述べた背景もあり、怒濤の勢いで諸外国からこの国に近代スポーツの文化がもたらされた。

三世紀に及んだ鎖国ののち明治の維新国家が展開した欧化政策の副産物として、ヨーロッパとアメリカから洋式スポーツが日本にもたらされたのがこの時期である。それは新政府に招聘されたいわゆるお雇い外国人と日本人の洋行帰り組とによって果たされたものであったが、東京大学の英語教員ストレンジが陸上競技とボートを、慶應大学の英文学教員クラークがラグビーを、体操伝習所の初代所長リーランドはボート、フットボール、テニスを教え、また鉄道技師の平岡靉は、アメリカから帰国後、我が国初の野球チーム「新橋クラブ」を創るといった具合であった。

洋式スポーツの移入窓口には様々な種類のものがあったが、わけても頻繁で持続的で、

そして洋式スポーツの日本定着に大きい役割を果たしたのは学校であった。学生発布1873年（明治5年）後の諸学校、わけても大学・高等師範学校・旧制高校など高等教育機関から、まず近代スポーツは浸透を始める。経済、政治、工業技術、思想、文学、音楽、食、衣、建築など文化のおよそ全ての領域で進行した欧化の中でも、取り分けて教育の分野で洋式スポーツの目覚ましい展開を見たのであった。ここに日本の特異な近代スポーツ感が生まれる素地があった。教育の場でスポーツを実践する事の意味づけが求められたのである。学校は学び舎で会って「遊びの場」ではなかったのだ。

ここにおいて英国発近代スポーツが「アスレティシズム的人格形成文化」への変化を遂げていたのは好都合であった。近代スポーツの母国英国においても19世紀前半までは「フットボールは肉屋の小せがれにこそふさわしい遊び」と言われるほど、スポーツ一般は社会的評価の低い文化とみなされていた。それが19世紀後半においては、英国社会の支配層を成していたジェントルマンと、彼らに限りない憧れを抱く新興中産階層たるブルジョアジィの子弟が通ったパブリック・スクールとオックスフォード、ケンブリッジ両大学の出身者による「たくましいキリスト教徒」運動家たちによって、スポーツの格上げが画策されたのである。それまでのマイナスイメージのスポーツは、さらにチームのために自己を犠牲とする滅私奉公の美学が添えられて、世界に広大な植民地をかかえる大英帝国を支える若きエリートを育てる不可欠の教育文化とみなされるに至ったのである。

こうしたスポーツ観は、金銭的報酬を求めない求道者的愛好者美学たるアマチュアリズムとともに、明治の日本人が学舎でスポーツを展開する錦の御旗となったのである。スポーツを、その原義（つまりラテン語の *Deportare*：遊ぶ）を消失せしめて、精神と身体の陶冶に資する文化と見るこうした考えは、近世の支配層のイデオロギーであった士道・武士道論で新解釈することも可能であり、以後長く日本人が近代スポーツと関わる時の模範的コードとして機能した。

## 第2節 日本の大学スポーツの歴史

外国から紹介されたスポーツの中で、この時期とりわけ盛んになったのは、ベースボールである。1891年（明治24年）ごろからの約10年間、無敵を誇っていたのは、一高野球部であった。1894年（明治27年）に「ベースボール」の訳語として「野球」が登場している。一高が1904年（明治37年）早稲田と慶應に敗れ、早慶時代が到来する。野球の人気は、高専や中学の対抗戦（宇都宮対水戸、五高対山口、一高対二高など）にも波及していった。市民の娯楽と言えば、花見、寺社参り、相撲見物などの「物見雄山」が主流の時代に、学生がアメリカ生まれの野球に講じる姿は、市民にとって刺激的であった。グラウンドで練習している学生を見るために、見物人が集まったほどである。対抗戦ともなれば、集まった人たちが球場はあふれんばかりとなった。朝日新聞や毎日新聞などの大手新聞が盛況ぶりを大いに書き立て、野球は一種の社会現象になった。

日本の大学スポーツを紐解くにあたり、やはりこの事を語らずにはおけない、明治、大正、昭和、平成、令和の5時代を歩んだ天下分け目のライバル決戦。早慶戦である。

早慶戦—早稲田大学と慶應義塾大学による対抗戦（定期戦）である。学生野球の聖地・神宮野球場を舞台とする野球に限らず、両校は様々な競技において、母校の威信をかけ、その思いをぶつけあってきた。英国のケンブリッジ大学対オックスフォード大学のレガッタ、アメリカのハーバード大学対イェール大学のフットボールと並んで「世界3大学生スポーツ」と謳われたほどである。現在の日本野球界の発展は、早慶両校を抜きに語ることはできない。球史に残る名勝負、名選手を生んできた早慶戦は2023年で120周年を迎える。1925年秋の東京六大学リーグ戦の発足よりも早い1903年にその歴史をさかのぼることができる。

早慶戦の起源について述べる。伝統の一戦と呼ばれる早慶戦の幕開けは、学生主体による挑戦状がその始まりだった。明治時代の連絡ツールと言えば、書簡しかない。先輩格の慶大に対して、早大が試合を申し込むのは自然の流れだった。

今はプロ野球の人気が高いが、かつて日本中を沸かせたのは早慶戦であった。日本一を争うゲームは「天下分け目の決戦」といわれた。世界3大学生スポーツのひとつ、とまで謳われたほどだ。1888年の創部した慶大に対し、早大野球部のスタートは13年後の1901年。創部2年目に学習院や横浜外人らの競合を倒して、「今度は先輩校の慶應とやろう」という事になった。早稲田の学生が慶應に挑戦状を持っていったのが始まりである。そして1903年（明治36年）、第1回の早慶戦が三田綱町グラウンドで開催された。

1903年11月21日。快晴の中で行われた「第1回早慶戦」は11対9で慶大が、先輩格としての面目を保った。早慶時代の幕開けに相応しい快晴の中で行われた1戦に、約3000人が集まったファンは学生らのワンプレー、ワンプレーに酔いしれた。

その後、早慶戦は野球から始まり、ラグビー、ボート、サッカー、アメリカンフットボールをはじめ13を超える競技で行われる定期戦へと発展していくのである。この歴史ある定期戦の始まりは早稲田大学の学生が主体となって慶應義塾大学に出した書簡であった。

### 第3章 一般社団法人大学スポーツ協会（UNIVAS）の現状と可能性

#### 第1節 スポーツ庁の「スポーツ成長産業化戦略」

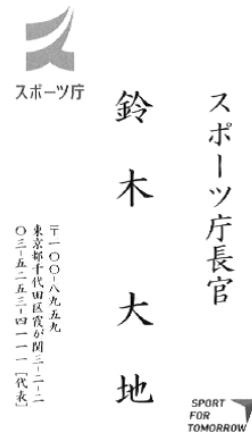
日本におけるスポーツの法令である「スポーツ振興法」が全面改正され、第177回通常国会において「スポーツ基本法」が成立し、2012年8月24日より施行された。

そして、2015年には文部科学省の13階に「スポーツ庁」が開設されている。

鈴木長官は2018年に大阪経済大学の客員教授に就任し、当学で講演を行って頂いた。

そのスポーツ庁が目指す「社会」についてスポーツ庁の資料から抜粋し下記に紹介する

- 全ての国民のライフスタイルを豊かにするスポーツ産業へ
- 「モノ」から「コト」（カスタマー・エクスペリエンス）へ
- 「負担（コストセンター）」から「収益（プロフィットセンター）」へ
- 「体育」から「スポーツ」へ
- ポスト2020年を見据えた、スポーツで稼ぎ、その収益をスポーツへ再投資する自律的好循環の形成



左は虎ノ門の文部科学省の正面玄関にあるスポーツ庁の看板、そして右側は初代長官である鈴木大地氏の名刺となる。※現在は室伏広治氏が2代目長官に就任。

- スポーツ産業の潜在成長力の顕在化，我が国基幹産業化へ
- 我が国 GDP 600兆円の実現への貢献
- スポーツをコアとして周辺産業に波及効果を生む，新スポーツ産業の創出
- スポーツを通じて社会を豊かにし，子どもたちの夢を形にするビジョンを提示

ここでの表記で特記すべき点は二つある。

一つ目は、「体育」から「スポーツ」へという概念の変化。二つ目は，随所にみられるスポーツの産業化というスポーツをビジネスとしてとらえる意識構造変化へのメッセージである。それらの概念に基づく，2017年から始まっている「スポーツの成長産業化戦略」の5か年計画がある，大学スポーツへの期待に関する表記も掲げられているので後述する。これらの資料は鈴木長官が当学での講演の際に活用された資料で，授業等を通じて多くの方に紹介して欲しいという承諾を得ている資料となる。

こちらの図-1は，経済産業省が掲げる GDP 600兆円に向けた「官民戦略プロジェクト10」における，④スポーツの成長産業化という項目において，日本におけるスポーツの事業規模を現在の5.5兆円から2025年を目標に15兆円に伸ばすと言う戦略が掲げられている。

こちらの図-2においては，その成長目標の数値として，大学スポーツ（アマチュアスポーツ）の領域でも現状の1000億円規模から3倍規模の3,000億円に成長させてほしいと国から期待されているという事実である。

こちらの講演は先ほども述べたが，2018年春に開催された，鈴木スポーツ庁長官の大阪経済大学における講演時の資料からの抜粋になるが，すでに大きなテーマとして，大学スポーツの活性化を考察されており，日本版 NCAA 創設に向けて3つのポイントを掲げ資料作成をされていた。一つ目は大学スポーツ安全性の向上，二つ目に学業とスポーツの両立，三つ目は大学スポーツ資源の活用である。

【図-1】



【図-2】



【図-3】



【図-4】



この三つが2018年当時のスポーツ庁の構想として挙がっていた事を理解すべきである。

こちらの具体的な施策を見てみよう。スポーツアドミニストレーターと言う表記が出てきており、定義としては、大学におけるスポーツ分野を戦略的かつ一体的に管理・統括する部局や人材と記載されており、その人材の責務が4つ想定されている。

- ① スポーツによる大学活性化
- ② 大学のスポーツ資源の活用
- ③ 質の高いスポーツ人材の育成
- ④ 学生のスポーツ環境の整備

そして最後に、その部局の活動目的が、大学スポーツを地域・経済の活性化の起爆剤へとされている。当時の鈴木長官がイメージしていた具体的な活動例を【図-4】に掲載する。立命館大学、同志社大学等の関西圏の大学もすでに具体的な活動を始めている。当学も大

阪経済大学という、経済を前面に押し出す大学としてスポーツとビジネスの新しい時代の在り方に大学として積極的に取り組むべき時代に入っていると考える。

## 第2節 大学スポーツ協会の設立と今後の課題

第1節で掲げられたスポーツ庁の構想の下に、2019年3月に設立されたのが大学スポーツ協会（UNIVAS）になる。まずは現状を説明する。こちらはHPにある理念と活動方針および会長のメッセージになる。

The graphic features a dark background with white text. On the left, it lists '組織理念' (Organizational Philosophy) and '活動指針' (Activity Policy). On the right, it highlights '大学スポーツの振興' (Promotion of University Sports) and '大学スポーツ参画人口の拡大' (Expansion of University Sports Participation). The central text reads '「大学スポーツの振興」に向けた UNIVAS の活動指針' and 'WE PROMOTE UNIVERSITY SPORTS'.

**組織理念**  
ORGANIZATIONAL PHILOSOPHY

「大学スポーツの振興」に向けた  
UNIVAS の活動指針

**大学スポーツの振興**  
学生アスリートが生き生きとしてスポーツと学修に取り組む  
大学・競技団体が更なる発展を遂げる

**大学スポーツ参画人口の拡大**  
大学スポーツに関わる人々を性別や障がいの有無等に関わらず  
平等に増やしていく

**活動指針**  
ACTIVITY POLICY

**WE PROMOTE UNIVERSITY SPORTS**

一般社団法人 大学スポーツ協会会長 福原紀彦氏の HP におけるメッセージより

「UNIVAS は、2019年3月1日に創設され、以後、大学スポーツの振興と参画人口拡大に向けて活動しています。設立から2年が過ぎた今日、学生アスリートのデュアルキャリア形成支援事業をはじめ、大学スポーツの安全安心な環境確立事業、ブランド価値向上およびDX推進等、数多くの事業を展開しています。

日本の近代スポーツは、大学によって導入され、発展してきた歴史があります。そして、スポーツが多様化する現代において、大学スポーツは、社会から期待される役割が益々大きくなり、今やスポーツ界全体の発展に貢献するプラットフォームを形成していると言え

ます。また、大学という組織にとって、教育・研究・社会貢献の各機能を発揮する上で、スポーツ活動への取組みは、たいへん重要な地位を占めていることは言うまでもありません。そして、学生アスリート達は、競技能力の向上に励むと同時に、さまざまな事を学び、知識を蓄え、社会で生き抜く力を養い、人間力を高めています。これらの経験を大いに生かして、将来、国際社会や地域社会に貢献していくことが期待されます。また、学生アスリートはもちろん、各大学の学生やOB・OG、役員・教職員、学生の保護者、大学のステークホルダーの皆さんが、大学スポーツを楽しみ、大学スポーツを応援しながら、大学スポーツの社会的価値を共有することこそ、大学とスポーツとがもたらす人類の持続的発展にとっての貴重な礎です。さらに、これからの大学スポーツは、DXとAI・データサイエンスを活用した新たな価値を創造しつつ、スポーツの社会的意義を高めていくことになると考えられます。

UNIVASは、大学、競技団体等の主体的な活動を支援し、社会と連携して、大学スポーツをさらに大きく発展させるための活動を加速させていく所存です。今後とも皆様の益々のご支援を賜りますようお願い申し上げます。」

以上が会長のメッセージである。

残念ながら、協会のHPのどこを拝見しても、スポーツの成長産業化における「大学スポーツ」の貢献は見あたらない。日本の大学スポーツの管理をする団体としてまずは屋台骨を創る事が先決であり、新しい時代における大学スポーツの産業化は二の次となったと考えられる。そもそも多くの大学でスポーツクラブの活動は課題活動であり、大学にとっては安全管理と学業との両立、スポーツ推薦で入った学生の将来の社会人活動への支援というところでディスカッションが終わったのだと推察する。

これではスポーツは大学の事業運営において未来永劫お荷物のままで終わると考えられる。鈴木長官の時代に考えたスポーツ庁の目指す社会の一つの課題である、「負担（コストセンター）」から「収益（プロフィットセンター）」への発想が見る事ができない。

ちなみに、米国の全米体育協会（NCAA）は、2019年の事業数値で1000億円を超える収益を上げている（1\$=100円）。NCAA（National Collegiate Athletic Association）は、設立が1906年で115年の歴史を持つ組織だ。

現在の加盟大学数は約1300。3カテゴリーに別れ、それぞれで地区リーグが編成され競技が行われている。野球やアメフトのようなメジャースポーツからボーリングやライフル射撃まで、24の競技種目で4万人以上の選手が大会に参加していると言われる。

NCAAは統括組織として、各種競技大会の運営管理や、大学および学生アスリートの管理・指導・支援などを行っている。統一ブランディングや大学間競争の推進などにより競技の付加価値を高めており、NCAAは莫大な収益をあげている。NCAAは年間1000億円の収益を得ており、収益の約8割はテレビ放映権などが占めている。収益は加盟大学に分配され、大学教育やスポーツ振興に再投資される。

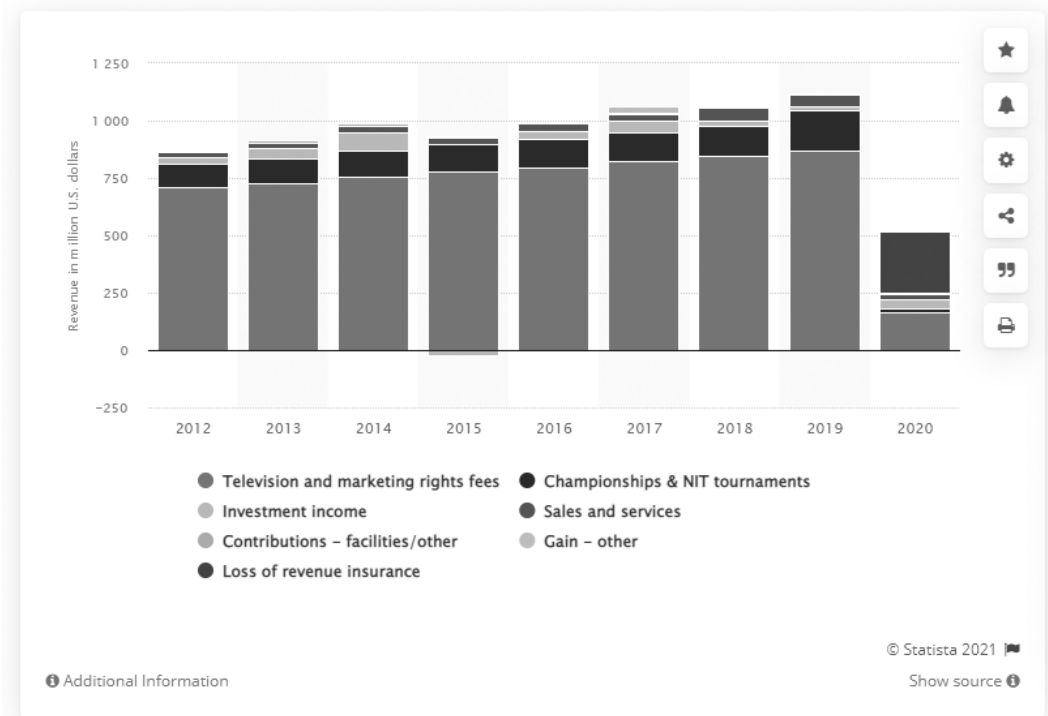
NCAAのHPにある「OVER VIEW」を紹介する。

「全米大学スポーツ協会は、大学アスリートの幸福と生涯にわたる成功に専念する会員

Sports &amp; Recreation &gt; Professional Sports

## Revenue of the NCAA by segment from 2012 to 2020

(in million U.S. dollars)



※STATISTA Research Firm in US  
最終閲覧日：2021年11月22日

主導の組織です。NCAAの学校は、毎年35億ドル近くのスポーツ奨学金を授与し、学生アスリートが一般の学生よりも高い率で卒業するのを支援するための膨大なサポートを提供しています。

3つの部門すべてで50万人を超える大学のアスリートが、50州すべて、コロンビア特別区、プエルトリコ、さらにはカナダの約1,100の加盟校をめぐって競い合っています。どこから始めようと、学生アスリートは24のスポーツでNCAAの90のチャンピオンシップの1つで毎シーズン終了するよう努めています。

NCAAのナショナルオフィスの従業員は、すべての選手権を監督し、学生アスリートに利益をもたらすプログラムを管理し、大学スポーツのルールとポリシーを作成するメンバー委員会をサポートします。加盟校と会議は、最終的に、採用やコンプライアンスから学者や選手権まで、部門に採用するルールを決定します。



NCAA の多様なメンバーには、数百人の生徒がいる学校から数万人の生徒がいる学校まで、さまざまな規模の学校が含まれます。NCAA の現在の 3 部門構造は、1973年に採用され、同様の学校のチームに公平な競技場を作り、大学のアスリートに全国選手権に参加する機会を提供しています。

3つの NCAA 部門の中で、ディビジョン I の学校は一般に最大の学生団体を持ち、最大の陸上競技予算を管理し、最大数の陸上競技奨学金を提供しています。ディビジョン II は、学業成績、高レベルの陸上競技での学習、および地域社会への奉仕に焦点を当てることにより、成長の機会を提供します。ディビジョン III の経験は、大学のアスリートがフィールドで卓越し、キャンパス全体の新しい課題に取り組むことで彼らの可能性を構築することを後押しする、競争の激しい陸上競技環境への参加を提供します。」

NCAA の HP にある「OVER VIEW」より

これだけの組織を創造するのに米国でも115年を要したわけである。2019年に設立された私たち、大学スポーツ協会（UNIVAS）の道のりも長いと言えるだろう。

そのような時間軸の中で今を生きる私たちがまさに今できる事を考察してみた。最終章ではわが国の大学対抗戦の考察と大阪経済大学における一提言を述べていきたいと思う。

## 第 4 章 日本の大学スポーツに対する提言

### 第 1 節 早稲田大学125周年事業のケース

第 2 章 2 節で紹介した野球における早慶戦の歴史を見てもわかるように、早稲田大学と慶應義塾大学の定期戦はまさに、オックスフォード大学対ケンブリッジ大学、ハーバード大学対イエール大学の定期戦を彷彿させる歴史がそこにある。

私がアディダスジャパンに在籍した際に、その歴史の懐の深みを感じる事象に関わったのでここにご紹介させて頂く。

当時、東京都新宿区矢来町（神楽坂）にあるアディダスジャパンの本社に早稲田大学の当時のラグビー部監督に就任予定であった清宮克幸氏から連絡が入り早稲田大学で会合を持つことになった。臨席されたのは、当時の早稲田大学副総長の佐藤英善先生である。そこで佐藤先生が述べられたことは、まさに早稲田大学のHPにも掲載されている内容になるのだが、「本学創設者である大隈重信公は、生前、「人は誕生すれば125歳まで生きることができる」という「人生125歳説」を唱え、適切に体力を保つことと同時に、人間の精神の強さと、高い志を持つことが生命の根本であることを訴えた。その後、本学にとって「125」という数字はとても重要な意味を持つこととなった」これに基づき、佐藤先生が述べた事は、2007年の大隈重信公125年生誕の年に、わが早稲田大学の4つのクラブが日本一を達成し、公の125年生誕をお祝いしたい。この話を佐藤先生から私が伺ったのが2000年だったと記憶している。つまりその時から7年後に、ラグビー部、サッカー部、野球部、陸上部がともに日本一を目指し精進努力していくこの行程をともに歩むつもりは無いか？というご相談だったわけである。その後、アディダスのフランス人の社長を説得し、ア

ディダスと早稲田大学の契約が出来上がった。そして少なくともラグビー部は2007年に日本一に輝き、創設者の125年生誕を見事に祝したわけである。大学スポーツがもたらす一つの歓喜をここに紹介した。

私は縁があり、その後ナイキジャパンに転職している。そこで私が考えたことは、アディダスが早稲田大学であれば、ナイキは慶應義塾大学であろうと考えて、強烈なアプローチを慶應義塾大学に向け、テニス部はナイキでサポートすることになった。そこで残り32体育会クラブを攻める手段を考えたが、早稲田大学のように内部における協力者となんらかの節目となるタイミングが無い中でこの構想は最終的にとん挫している。

私が早慶戦にイメージしていた構図はこうだ。早稲田と慶應の代表される定期戦を支援する会社を全て競合社で固める構想である。アディダスとナイキ、コカ・コーラとペプシコーラ、キリンビールとアサヒビール、VISAカードとマスターカード、トヨタと日産、明治安田生命と日本生命、HISとJTB、日本航空と全日空、大塚製薬と大正製薬、等々業種ごとの競合会社は必ずある。それらの企業が早稲田サイドと慶應サイドに分かれ、定期戦の日程に向かい大規模なプロモーション合戦を同時に行うのである。単なるスポンサーシップをTVのCM枠や会場看板やプログラム広告や大型ビジョンのCM枠やチケットの枚数で大会への投資の価値交換を起こす時代は終わって、歴史的な一戦を新たなマーケティング活動の場に変化させるようなピクチャーを描いても良い時代に入っていると考える。

## 第2節 大阪経済大学への提言

こちらに記すのは、どの大学にもある周年事業に向けた考えであり、大阪経済大学のHPにも掲載されているものの転記になる。ここからの記述はその構想に基づいたスポーツを核にした90周年に向けた私の提言の内容になる。この提言の骨子を構想したのは2018年で2022年までまだ4年間の時間軸があったことを理解しこの後の提言を読んで頂ければと考える。90周年ではこのような壮大な形をとることがコロナ禍の影響もあり難しかったが、このような構想の下に2032年を創造して頂く事を強く期待している。

タイトル：大阪経済大学90周年に向けてそしてその向こうに

100周年に向けた本学の在り方：商都大阪から、生き続ける学びを創発する場となり、社会に貢献する人財を輩出する。ここより、MISSIONは3つと想定し100周年に向けた本学の在り方を考える

1. 商都大阪から
2. 生き続ける学び
3. 創発

VISIONは4つあり、教育の質保証を実行し、大経大スタイルを確立することを目指している

1. 教育ビジョン
2. 研究ビジョン

### 3. 社会実践ビジョン

#### 4. 組織運営ビジョン

これらの事を鑑み、100周年に関連する全ての事業はこのミッション・ビジョンに沿ったもので在るべきであると考え。90周年事業は100周年事業に向けたマイルストーンである。100周年事業がより壮大なものになるベンチマークを90周年事業を通じて遺産として残すことが大事と考える。

**企画骨子**：全学（学生，教員，職員）のみならず，卒業生の方々，そして地元住民の方々，全てを巻き込む，90周年に向けた**夢の創発**である。国も考える大学とスポーツのこれからの未来の形，これに対して大阪経済大学として全国の大学に先駆けて一石を投じたいと考える。

**目的と戦略**に移る。目的は学内スポーツ活動を最大活用した2022年の秋（90周年）に向けた夢のプログラムの創造。そのプログラムを通じて，次の2点の目標を達成する。

1. 大阪経済大学のブランド価値の向上
2. 大阪経済大学の事業数値の向上

学内予算のみに頼らず大阪経済大学が持つスポーツの資産を最大化しそれを資金に換える活動をするを目的とし，その活動を通じて大学ブランドの向上に努める。

大事な戦略は早稲田大学や慶應義塾大学のようなスポーツの歴史も無く，トップ校ではない大学の場合に，ひとつ，ひとつのクラブのパワーではなく**複数のクラブ×各クラブの夢の創発×90周年事業＝夢の創発**，というような複数の因子をうまく掛け合わせることで，協賛企業が提供する価値（資金）に対する価値交換を創造することになる。

黙っていてもお金が集まるケースではない場合は知恵とアイデアでその創造をするべきと考える。少し詳しく述べていく。

「**夢の創発**」というキーワードの一例を下記に掲げる。

2022年に君が叶えたい夢はあるか？と課外活動に励む学生に尋ねる，それがアメリカンフットボール部とする。現在は惨めな3部リーグ，しかしここから奮起して2部リーグに上がり，学校の支援もあり，さらに強化支援が実現し，その後1部に昇格。晴れて2022年シーズンに関西学生アメリカンフットボールリーグの1部所属チームとして，2022年の秋のシーズンに90周年事業の一環としてvs 関西学院大学ファイターズ戦を満員のヤンマースタジアム長居で多くの学校関係者に観戦してもらう。

これが私の想像する「**夢の創発**」になる。これは強要するものではなく，あくまでも学生たちの想い・夢が最初にあることが大事であると考え。

つまり，夢は期日を決めたときに目標が変わる。いつか？いつか？と思っている間は眠っているときに見る夢と同じだ。夢に期日を入れる。人々はその潔さとそこに向かう道（喜び，涙，楽しさ，苦しみ）に感動するというストーリーの創造にある。

それらの学生の夢の総意を基に協賛社の資金と価値交換を起こすという基本構想である。学校が周年を迎えるタイミングに向けて皆が精進努力するという構想だ。

協賛社からの提供物に対する価値交換を起こす大事な要因の一つとして，学生たちの夢

の実現のために手を貸して頂くと言う要素を組み入れる考えだ。これは学生たちへの教育面での教えにも顕在する。つまり、実現できない夢もある。しかし夢を描き、その夢を実現するために、持てる限りの智力、体力、気力を振り絞らない限り、人間が鍛えられず、絶望の味も、歓喜の味も知らず心も、生活も豊かにならないまま人生を終える事になる。

ようするにやってみなければできかどうかわからない。ジャパネットたかたの高田社長も当学の入学式でおっしゃっていた。「いくつになっても常に夢を抱き、その夢に向かって、日々精進する」この重要性をこの活動を通して参加学生にも感じてもらいたいわけである。もう少し詳しく説明する。

まずは、2022年に向かい「夢の創発」を考えるクラブを10クラブ募る。基本的には強化クラブが中心になるかもしれないが、基本10チームと想定する。

イメージとしては下記のようなクラブを想定している

サッカー部、硬式野球部、ハンドボール部、バスケットボール部、陸上部、アメリカンフットボール部、ラクロス部、ラグビー部、ゴルフ部、テニス部

そこから審査を経て、1st Class 5個、2nd Class 5個に分ける。事前に掲げたガイドラインに応じて1部と2部は毎年入れ替わる。

この基本構想のもとに、ひとつ、ひとつのクラブのパワーではなく複数のクラブ×各クラブの夢の創発×90周年事業＝夢の創発

これらの活動をパッケージにし、協賛企業のスポンサーシップの誘導を企画する。

営業企画の骨子は4つになる。

1. スポンサーシップ
2. 商品化ビジネス
3. ホーム試合の興行活動
4. 寄付行為

スポンサーシップから説明する。基本的には各企業に対しての提案書は、都度ゼロから創造するので、条件により内容は変更する事を基本とする。

現在考えられるMAX. の10の提案内容はこちらになる。

1. チームのユニフォームにおける露出
2. 摂津、茨木グラウンドでの露出
3. 各チームのホームゲーム会場での露出の確保（要主催競技団体との調整）
4. 当方が用意できる制作物への露出
5. スポンサーの商品の開発・販促に関する大学全体を挙げてのアイデアの供出、チーム提供製品を中心とした商品化権と大学関係者への販売促進（学生、教員、職員、卒業生、地域住民等）
6. スポーツ・文化センターとの連携事業の促進
7. 協賛企業へのインターン生の供出
8. 専任教員との研究活動の促進（産学連携）
9. 全学挙げての広報活動

## 10. 自治体との可能な限りの連動活動（東淀川区，大阪市，大阪府）

提案先の企業の選定とその企業研究に基づく営業企画書の策定を今後の「Zemi One GP」のテーマとして毎年，学生たちが協賛社への提案に何う形をとっても面白いかもしれない。営業企画書に盛り込める要素をいくつか紹介する。

ではひとつずつ詳しく述べよう。

### 1. チームユニフォームにおける露出

全てのクラブがカラーの統一されたユニフォームとロゴマークとチーム名で試合に臨む。野球等のチーム名，ロゴマークの露出が難しいところは出来る限りの統一感を出せるよう努力をする。10クラブの公式戦の総数は年間100試合を超える。かつ，彼らのトレーニング時のアパレルも全て統一し露出される。これらの模様は公式戦中継のメディア及び当学の広報課を通じ幅広く広報される。下記は現状の画像となる。



※大阪経済大学 公式 HP より

当然チーム名，ロゴ，ユニフォームのカラーは統一される。これらは周年事業に向けて新しく開発される。これらのスポーツアパレルのブランド統一も大事な要素となる。このサポートブランドと後述のライセンス展開を図る。

### 2. 大隅体育館，摂津，茨木グラウンドでの露出

大学の専用施設におけるブランド露出，8,000名の学生および近隣住民が授業および課外活動で訪問する場所になる。100周年に向けてグラウンド内に仮設の観戦席を構築したい。小規模の観戦スタイルは大隅体育館と摂津グラウンドを想定している。

いつもの授業や課外活動の場所が多くの人々の交流の場と化すのである。

まずは，このグラウンドを一つの色で染め上げることが当初の目標となる。



### 3. 各チームのホームゲーム会場での露出の確保（要主催競技団体との調整）

上位ブロックの5チームの公式戦のホームゲームを所属競技団体と交渉し、大学の主催ゲームとして運営する。「Home Coming Day」として、大学を挙げてのイベントとして活動する。例えば、その開催日には東淀川区に許可を取り、キャンパスから大隅体育館および摂津グラウンドまでパレードを開催し、関係者が全員同じ色の何かを身に着けて体育館やグラウンドまで出向く。そして声を上げて試合の応援に参加する。この模様をあらゆるメディアを巻き込み広報に努める。やがてこの活動の継続がヤンマースタジアム長居を5万の観衆で埋め尽くす日の序章となる。



### 4. 当方が用意できる制作物への露出

大学の広報課を中心とした活動に可能な限り露出する。



※大阪経済大学 公式 HP より

## 5. スポンサーの商品の開発・販促に関する大学全体を挙げてのアイデアの供出，チーム提供製品を中心とした商品化権と大学関係者への販売促進（学生，教員，職員，卒業生，地域住民等）

大阪経済大学と言えば「ゼミ」の大経大と言われている。経済学部，経営学部，情報社会学部，人間科学部を上げて協賛企業との産学連携を含めた展開が可能である。



※大阪経済大学 公式HPより

### 例) 協賛企業への企画提案

前述したような「Zemi One GP」との連携を構築すれば，4学部（5学部）を巻き込んだ全学的な活動の場に昇華させることも可能となる。

### 例) ライセンシング商品の開発

想定される商品化群としては，（スポーツアパレル，アクセサリ（サングラス），アクセサリ（バッグ），アクセサリ（キャップ），アクセサリ（カサ），シューズ，文房具，ピンバッジ，自転車，ステッカー，地図，マグカップ・スクイズボトル 等々

※販売対象者（学生，教員，職員，卒業生，地域住民等）



※筆者が現地にて個人撮影した画像

## 6. スポーツ・文化センターとの連携事業の促進

当学のスポーツ・文化センターは，課外活動や学生の地域貢献をサポートする。2018年4月，学生部スポーツ・文化振興課の下に新設した「スポーツ・文化センター」は，「日本版NCAA」をモデルとし，スポーツに加え，文化系のクラブ活動もサポートし，すでに

本学にある「資源」「実績」を活用し、学生の学び（学業両立）、クラブ活動と地域貢献・社会貢献を結びつける取り組みを行っている。本学学生がスポーツだけでなく、文化系クラブ活動の指導にあたることで、子ども達にスポーツや文化系クラブ活動の楽しさを伝え、小中学校教員の負担軽減など、地域社会への貢献を目指す。これによって、レギュラー以外の学生にも新たな活躍の場を創出し、勝敗だけではなく、社会で活躍できる人材の育成を目指している。これらの活動を協賛企業と更に促進していく。

主な取り組みとして、下記のような活動がある。

【クラブ学生活動支援】デュアルキャリア（クラブ活動と学業両立）を掲げ、クラブ活動支援、学業支援を行います。大学4年間は社会に出る前の重要な期間であるため、クラブ活動だけに注力するのではなく、クラブに関する相談や出席、単位修得状況の確認などの支援を行う。

【地域貢献・地域連携推進】学生が地域の子供達にスポーツを教える「キッズカレッジ」や、近隣の小中学校での部活動指導に本学学生が参画します。また近隣小中学校との施設相互利用も行うなど地域交流を行う。

【マネジメント】学生企画、クラブ応援、ボランティア活動のサポートを行い、学生に実践の場を提供する。

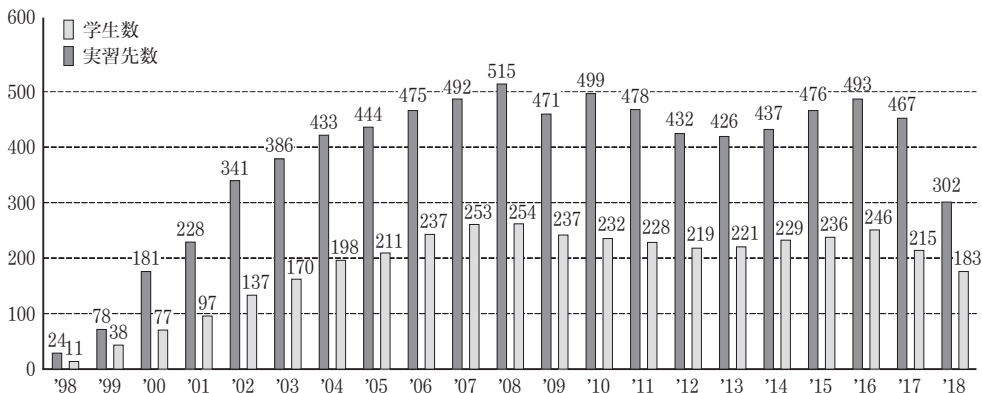
【民産学官連携推進】本学の資源を活用して地域・企業・行政との連携した実験や研究活動を行う。

## 7. 協賛企業へのインターン生の供出

企業や自治体での就業体験を通して、将来の進路を模索する。大阪経済大学のインターンシップは全国でも有数の充実度を誇り、毎年多くの学生が企業・団体の実習に参加。

インターンシップを希望する学生には、大学との提携企業を受入先として紹介している。これらの活動を協賛企業との間で更に発展させていく。

### ▶実習先数・参加人数の推移



※大阪経済大学 公式HPより



## 8. 専任教員との研究活動の促進（産学連携）

大阪経済大学は実践的な知識・能力を育む学部体系を誇る。

経済学部，経営学部，情報社会学部，人間科学部と4学部にわたり豊富な専任教員が100名以上在籍している。すでに大手企業と産学連携を進める先生方も多数存在する。何らかの分野における連携活動を想定している。



経済学部



経営学部



情報社会学部



人間科学部

※大阪経済大学 公式HPより

## 9. 全学挙げての広報活動

大阪経済大学が現在行っている地域に根ざしたグラスルーツ活動を紹介しよう。

**大経大キッズカレッジ：**地域の子どもたちと「つながる力」大経大キッズカレッジは、本学近隣の小学生を対象とした各種スポーツ教室になる。本学は、都市部にありながら広大な人工芝のグラウンドを所有しており、そのグラウンドを地域の子どもたちに開放し、思う存分スポーツを楽しんでもらいたいという思いが出発点だ。参加した子どもたちにスポーツの楽しさを伝え、今後、様々なスポーツに挑戦していくきっかけとなるようなスポーツ教室を目指している。野球教室、サッカー教室、かけっこ教室、フラッグフットボール教室、バスケットボール教室、チアリーディング教室、タグラグビー教室などがすでに活動している教室となる。また、大経大キッズカレッジは、実施内容の企画、当日の運営、講師を学生が務めるところに一番の特長があり、地域貢献だけでなく、学生教育支援の一環としても位置づけている。キッズカレッジを通じて地域社会に寄与し、参加した子どもたちと本学とのつながり、子どもたち同士のつながり、家族とのつながりなど「つながる力」が広がる機会を創出しているのだ。

**地域での健康づくり講座：**地域に出向き学生が主体となり、シニアの健康寿命を延ばす運動を実施している。（よどまちステーションにて）

**きさんじ塾：**高齢者運動教室として学内で、高齢者を対象とした運動教室『きさんじ』を開催している。



※大阪経済大学 公式HPより

これらの活動を通じて、大学スポーツを支援する協賛企業の広報活動のサポートも考えていく。

### 10. 自治体との可能な限りの連動活動（東淀川区，大阪市，大阪府）

本学では、巨大地震等の発生時に外出先で帰宅困難者となった際に、歩いて帰れる20kmを目安として5時間歩ける健脚づくりと、普段から何気なく歩いているまちを防災という視点から見直して、まちの魅力を再発見することを目的に、2017年度からこのイベントを開催している。

### 第3節 結論

ここまで述べてきたことを最後に結論として要約する。

- 日本のスポーツは50年ぶりに2011年に施行された「スポーツ基本法」によって新しい時代を迎えた。
- その時代に向けて、2015年に創設された、文部科学省のスポーツ庁が出した提言を記した。
- また、同じくスポーツ庁が提言する2017年からの5か年計画「スポーツの成長産業化戦略」にある大学スポーツへの期待を記した。
- 上記にあるように国がスポーツ事業に、大学スポーツの成長に大きな期待をしている事実を列挙した。
- 2019年に立ち上がったUNIVAS（日本版NCAA）に上記のような活動の期待が出来ないことは现阶段の事実である。
- ゆえにスポーツ庁の期待する活動は個々の大学に課せられていると言える。
- 海外の活動（NCAA, IVYリーグ, 英国の大学対抗戦）から学べる要素はあるがスポーツの文化成熟度が遅れているわが国では参考例になるものが少ない。
- 我々はイェール大学でもハーバード大学でもケンブリッジ大学でもオックスフォード大学でも早稲田大学でも慶應義塾大学でもない。
- ゆえに、与えられた環境で大学スポーツの日本における新しい形を「創発」するしかないと考える。
- その一つの提言を今回の論考の中にまとめた。

私は2023年3月末で大阪経済大学の定年を迎える。2032年の100周年の際には残念ながら影も形もない教員である。今回の私の提言を参考にされ、何らかの形で2032年に向けて大学スポーツを根幹におく、100周年事業が実現されることを心から祈念する次第である。

### 第4節 今後の課題

この稿を閉じる時期は2021年12月の暮れである。コロナ禍もまだどうなるか？わからない状況で学校運営は続いている。しかしながら人類の英知をもってすれば、やがて平時に戻り、昔と同じような生活が送れる日は戻って来ると信じている。この2年強の時代を過

ごした経験は人々に、デジタルだけではない人との交流の大切さを老いも若きも心の真髄から思い知ったことだと考える。やがて戻ってくる時代に人々の心を繋ぐ強力なチカラがスポーツにはあると考える。そのチカラをもって大阪経済大学の全ての関係者（学生、教員、職員、卒業生、地域住民等）に当学のスポーツ活動を通じて「生きていてよかった」と思える一瞬を演出できればと思う。今回の寄稿は私の少なからずの知見をまとめたものである。なんらかの示唆をここから見出され、2032年の100周年の場で見事な事業として花開く事を、それを正に実演される若き人々が出てくることを強く祈念する。

#### 参考文献：

- レイモン・トマ著 蔵持不三也訳（2005）スポーツの歴史〔新版〕 白水社  
新井博 編著（2021）スポーツの歴史と文化 道と書院  
トニー・メイソン著 松村高夫・山内文明訳（1991）英国スポーツの文化 同文館出版  
望田幸男・村岡健次 監修（2002）近代ヨーロッパの探求・スポーツ ミネルヴァ書房  
鈴木秀人 著（2002）変貌する英国パブリック・スクール 世界思想社  
菊谷匡祐 著（2003）早慶戦の百年 集英社  
池田哲雄 編集（2014）早慶戦110年史 ベースボールマガジン社

#### 引用文献：

- The Varsity Match 公式 HP <https://thevarsitymatches.com/> 最終閲覧日：2022年1月5日  
The Varsity Match fact book by PSG  
鈴木大地スポーツ庁長官（2018）スポーツの成長産業化 PPT 資料  
NCAA 公式 HP <https://www.ncaa.org/overview> 最終閲覧日：2022年1月5日  
STATISTA Research Firm <https://www.statista.com/statistics/219605/ncaa-revenue-breakdown/>  
最終閲覧日：2021年11月22日  
大学スポーツ協会（UNIVAS）公式 HP <https://www.univas.jp/>  
最終閲覧日：2022年1月5日  
大阪経済大学 公式 HP <https://www.osaka-ue.ac.jp/> 最終閲覧日：2022年1月6日  
100 Best Colleges for Sports Lovers <https://money.com/best-colleges-sports-lovers/>  
最終閲覧日：2022年1月6日  
highest quality athletic band <https://bandwindow.com/> 最終閲覧日：2022年1月6日  
Vecteezy <https://www.vecteezy.com/vector-art/833713-90th-anniversary-badge-templates>  
最終閲覧日：2022年1月6日  
Cannypic <https://www.cannypic.com/free-vector/sport-brands-326783>  
最終閲覧日：2022年1月6日